

自覚的屈折検査(他覚的屈折検査が不可能で視力が不良な場合の方法例)

準備物 検眼枠・遮閉板・検眼レンズ・視力表・0.1の字ひとつカード・クロスシリンダー

屈折異常に関する手がかりを問診にてさぐる

- ・いつから見えにくいのか？(急にみえなくなったのか、徐々になのか)
- ・どのように見えにくいのか？(2重なのか、まぶしいのか、ゆがんで見えるのか)
- ・見えにくいのはどの辺りか？(遠くか、近くか)
- ・眼鏡を使用しているか？(何歳頃から使用しているか、日常どういう時に使用するか、所持していれば度数を測る)

オートレフ測定が不可能な場合、中間透光体の異常を考える。多分矯正視力も悪いと予測できる。オートレフがとれても屈折度数がバラバラになる(特にC面)場合、白内障のことが多い。縮瞳が原因であるのなら部屋を暗くし、散瞳状態にさせると測定できる場合もある。患者の矯正の負担を考えれば、とにかくオートレフが正しく出なくとも取れるように努力すること。

裸眼視力大よそ0.04未満の場合

0.1のカードを眼前に提示し、見るように指示する

裸眼視力0.05~0.09位の場合

見えなくとも視力表の0.1の視標の位置を見るように指示する

裸眼視力0.1以上の場合

視力表の裸眼視力の1~2段位上の視標の位置を見るように指示する

予測した屈折異常の方向を念入りに、必要ないと思う箇所は飛ばすこと。近視視力を測るのも1つの手。

基本的には屈折を理解していないと臨機応変は無理!

YES 遠視 S+1.0D 加えて見やすくなるか?

NO 又は 判らない

YES 近視 S-1.0D 加えて見やすくなるか?

NO 又は 判らない

±1.0D位を持ち検眼枠の前に置き、どちらが見やすいかを聞いてゆく。

YES S±2.0D~±10.0D位までを繰り返し見やすいレンズをさがってゆくと見やすいレンズはあるか?

判らない又は変化なし

見やすいレンズの上から S±1.0D~±0.5D位までで、どちらが見やすいかを比較させ、見やすい方向のレンズを装用して大まかに球面レンズを調整する

厳密にすることは不可能だが、調節は無視するとして乱視があるなら最小錯乱円の位置になっている可能性は高い。

判らない又は変化なし

球面レンズに大体 C-1.0D~-5.0D位を AX180、90、45、135° など、順次適当に入れて、少しでも良く見える軸と度数があるか? (視標はラ環で良い)

C面の度数は視力やケラトの状態から推察して考えるしかない。クロスシリンダーが可能なら、クロスシリンダーで!

YES

その軸と度数のあたりで円柱レンズの度数を前後し最高視力が出る円柱レンズを求め、再度球面レンズも見やすいレンズを大まかに探す



もう少し厳密を望むなら!

NO 矯正視力がほぼ(0.1)以上出ているか?

YES

少しでも良く見えた符合と度数の球面レンズを再度前後させて微調整し、最高視力が出る最も+寄りの矯正レンズを求める

0.1のカードを眼前に提示し、再度円柱レンズの軸を適当に動かし少しでも良く見える軸と度数を再度探すか、可能ならC.Cで乱視の軸と度を微調整する



乱視がはっきりしなくとも仕方ない。矯正視力が悪いなら、球面レンズのみの矯正で等価球面状態になっていたとしても矯正視力的には大差ないでしょう。



もちろん後焦線を網膜付近に持つてくる為。

被検者の返答などから乱視度数の多少を推測し、可能なら、雲霧状態にて乱視表を見せるか、そのままの屈折度数でC.Cを使用して、乱視の軸と度を微調整する



本当は、乱視表の使用は、視力(0.7)以上ないとはっきりした答えは返ってこないと言われている。

再度球面レンズを微調整して最高視力が出る最も+寄りの矯正レンズを求める

その値がおおよその矯正視力値と屈折度数 (円柱レンズを装用しても矯正に変化なし)

その値がおおよその矯正視力値と屈折度数

矯正不能